小田原史談
第92号
発行所　小田原史談会
小田原市南町3の21

# 水郷潮来に散った悲劇の小田原志士

中野敬次郎

小田原史談会は去る六月二十五日、二十六日に一泊二日の行程で、潮来水郷めぐりと銚子、犬吠崎見学を中心とした史跡めぐりを開催したが、佐原市における伊能忠敬の遺跡、遺品の研究、鹿島、香取両神宮の建物調査、新興鹿島港の見学など一般観行とちがった収獲があって、大いに有意義な史跡めぐりであったが、また潮来において、幕末に悲劇の最後をとげた小田原出身の勤王家石川於兎次郎の墓に一同が詣でることになり、併せて墓のある長勝寺のすばらしい本堂の古建築の見学をし得たのも一意義であった。

もっとも一行約四十人中で私だけは、昭和三十年の九月に招かれてこの墓供養に参列しており、同地で「石川於兎次郎の生涯」という講演もしている経験があるが、他の方々は、石川於兎次郎という人物を知る人も少なく、まして、こんな処に埋葬されていることは誰も知らなかったであろう

小田原大久保藩は譜代大名の有力な家柄だから幕末騒擾の際には佐幕思想が強かったが、藩士の中には勤王派も多少あって、藩儒中垣謙斉と明治政府の陸軍法務部長になった岡本隆徳とは知られているが、石川於兎次郎は異郷の地で悲憤の最後をとげた人なので全く無名であって、生涯の行績もよくわからない。

石川家は、祖先は美濃国出身で、大久保家が加納城（岐阜市）主であったとき召し抱えられ右筆をつとめ大久保家が小田原に来てからは中小姓役として九十石を食んだ家柄であるが、於兎次郎がどういう次第で勤王派に走ったかは明かでないが、石川家が学問の家柄であるので、彼も学問があり、いつしか国事に奔走するようになったのであろう

幕末の小田原藩では一藩の侍中が佐幕に傾いていたから勤王派は藩内に活動する余地がないので彼も脱藩して氷戸の尊王党に投じたのである。

水郷の潮来は水戸領であって、河川や水濠が縦横に交錯しておって、志士達の隠密計画の場所として好適の地なので、於兎次郎も水戸志士たちとこの地に来って、盛んに討幕を画策して奔走しつつあったのであるが、当時は水戸藩にもても尊王佐幕の二派があり、尊王派にさえ左右両派があって激しく争っていたから、他藩から来た同志には警戒をおこたらなかった。たまたま、討幕実施の方法を画策中に、於兎次郎がひそかに遠来の客と某所で会談したが、この客は誰であったか、於兎次郎は最後まで語らなかったので明かでないが、小田原から訪れた人でなかったかと思われる。

この密談が水戸藩同志の疑惑を呼んで、多数の同志達から激しい詰問にあったが、於兎次郎は何故かどうしても密談の内容とその人とを語らず、身の潔白を証明するために同志の見守る中で割腹して果てたのである。全くの詰腹を斬らされたという形であった。

昭和三十年私が最初彼の墓参に行ったときは、その割腹の場所がまだ残っていて、潮来町の中央にある遊廓の一軒で「魚林」（うおりん）という家で、その家に上って見ると、その二階の天井の低い薄暗は遊女の一室であって、愁然たる気持になってしまった。於兎次郎は二十五才で、元治元年（一八六四）正月十八日であった。

しかし、水戸藩の同志達は彼の死に深く同情して藩命をもって、その遺体を長勝寺の墓地に厚葬した。潮来の有志たちも深くその死をいたんで、相計って墓地を建てた。

長勝寺の住職の話によると、水戸藩士同志の間でも潮来では相当の争いがありこの地で死んだ志士も数人はある筈だが、引取人があったためか、何かは知らぬが、墓のあるのは石川於兎次郎のもののみであって、彼の死が地元で人々に感動を与えたことが察せられるということであった。

さて、この長勝寺であるが、この寺はまにとにすばらしいお寺で、墓参とともにこの寺内を見学することができたのは、今回の史跡めぐりの思わざる収獲であった。

潮来町の中央の一丘陵の深緑樹林帯を背負って建つ鎌倉時代建始の禅苑である

古色あって素朴雄大な山門と本堂がある。

寺は鎌倉右大将源実朝の祈願建立の寺であって、本堂（仏殿）は十間四面、鎌倉時代の禅宗建築がそのまま残り、禅苑として関東においても数少ない古い建物で中に入ると頗る圧感を覚える。山門には木像十六羅漢を安置し、仏殿とともに重要文化財指定である。また仏殿前に元徳二年鋳の古鐘の楼があって楼に上って見ると、古鐘には鐘面に、鎌倉円覚寺の清拙禅師の長い銘文を刻されていて、すばらしさを感ずる。勿論重文指定である。

石川於兎次郎の墓は、この寺の境内墓地の中央にあって、立派な石塔に「石川於兎次郎墓、元治元年正月十八日、二十五歳」と刻んである。院号の記してないのは、檀家の墓でなく、有志によって廻てられたものであるからだろう。墓石は朽ちた堂屋の中に収められてあるが、墓石の周囲を見ると「石川様」と刻書した石柱や木柱が大小沢山積まれてある。

これは於兎次郎が遊女屋の二階で割腹したので、女性の同情が信仰とかわり、特に水商売をする女達にあがめられるようになり、この「石川様」の石柱を捧げて祈願をすると、良い男に恵まれ、よい子供に恵まれるというし、また金もうかるというので、潮来女性の守神、潮来芸者の神様となってしまったのだそうな

昭和三十年私が墓参に出かけた頃は、石川様信仰の絶頂期で、その頃遍照講茨城県連合会というものがあって、小田原市に呼びかけがあって、「維新以来、幾星霜のあいだ、その墓石に額づけば諸願成就の霊験著しく、堂宇を建てて里人が尊仰し香煙絶ゆることがなかったが、太平洋戦争後堂

宇は荒れたままになっているので、今回遍照講潮来支部で堂宇を改修したので、慰霊の法会を行うから、石川様は小田原藩士出身であるから、市の代表が法会に参列してほしい。」という依頼状が市長宛にあったので法会には間に合はなかったが、後改めて私が市を代表して、墓参に行ったのが同年九月二十三日で、当時の小田原有信会の会長故佐藤氏、幹事故岩瀬氏が同行して三人で行き、非常な地元の好遇をうけ、私が石川於兎次郎の生涯に関する講演をしたのも二十数年前の思出となった。

今回の史談会史跡めぐりで同寺を訪れたが、二十年の歳月の流れは今昔の感をそそろ深くした。墓石の上を蔽うた堂宇は朽ちて傾いていた。「石川様」の石柱も古いもの許りで新しいものは一本もなかった。もう誰も参らなくなったものと見える。

若い長勝寺の住職も、石川於兎次郎の経歴については殆んど知っておらず、我々の大勢の墓参にちょっとまごつたような顔をしていた。しかし、一行は住職の親切で、前記したような同寺のすばらしい仏殿と山門と梵鐘とを見学して望外の収獲を得たが、その喜びの裏に一抹の淋さを感じつつそこを去ったのである。

石川於兎次郎の本家は今も小田原市栄町三丁目五ノ一八石川良治氏の家として存在する。

# 酒匂中宿の家号・呼称と大正期の家並

川瀬速雄

私の家は家号を「玉や」と云ふ。玉やと言うが花火屋でわない。江戸末期に街道でお茶屋兼安旅籠を営なんでいた。お茶汲みにお玉と云ふ美しい娘がいつも愛嬌をふりまき「お玉の茶屋お玉が茶屋」と評判になりいつしか「玉や」と云われ以来玉やが家号となったと聴く。

この茶屋当時の遺品（矢立て、鉄扇、脇差、煙草入れ等の道中用具や着類、什器類なぞと大福帳が一冊）大福帳はかけ売りの覚書きか。

うどん一杯、酒一本　〇〇べえ　〆〇〇文
わらじ三足　××すけ　〇〇文

等記入した半紙二つ折の帳面を子供心に覚えている。これ等の品が雑然と車長持ちに入れてあった。脇差しなぞ持出してよく叱られた（車長持ちは、約一・八米×一米×高さ〇・六米位の厚板で出来た頑丈な長持ちで、木製の車が四っ付いており、鉄環に綱を付けて非常の際引いて逃げられる様に出来ていた）しかし、昭和二十年の空襲で家に至近弾を受け死者、負傷者を出し、家は大破しその時の「ドサクサ」にまぎれて車長持ちごと紛失し、今わずかに当時を偲ぶものとして、旅人が宿銭がわりに書いて行ったと云ふ書、絵が数幅残っているのみで残念である。

書きおくれたが私の家は酒匂北中宿（通称中市場）で茶屋の在りし場所は現在の「サービスステーション小田原観光」の処で、道路の北側に巾約一米の小川があり常時清らかな水が流れており川縁に足洗用の大きな平たい石があった。

酒匂中宿（南北）は東海道（国道一号線）の南北両側で別名本宿とも呼ばれ、新編相模国風土記稿や皇国相模国地誌に計載されている小島徳右衛門、鈴木新左衛門、酒井五郎右衛門宅や酒匂に伝はる「坂田の金時」山姥伝説の田中屋等旧家が軒を並べた酒匂の中心街であった。

酒匂は近年（昭和十六年）大蔵省印刷局が誘致されてより急速に発展した。昔は人口も戸数も少なく農村とも宿場ともつかない特異な村落であった。皇国相模国地誌の明治十八年の人口、戸数、民業を小八幡と比較すると（図1）となり、酒匂と隣村小八幡との村落の形成が、だいぶ異なっている事がわかる。

家号も小八幡にわ、大セド（東）浜ん台（西）大うら（北）等地形的（小八幡村落の東西北のはずれで、この三角地区に小八幡は入る）なものや（大船頭、縄や、大仙）等漁業に関係したものが目立ち、酒匂では（田中屋、玉や、大山屋、福島屋）等宿場に関係したものが目立つ。

私は子供の頃（昭和初期）を思い出しつつ古老の談話を総合して、大正期の中宿の町並み及び家号図（図2）を作って見ました、家号（呼称）はその家の特色を現わし、酒匂宿を知る一つの方法ではなかろうか。

家号、呼称る大別すると

1、世襲人名によるもの。
2、世襲では無いが当主、又は先祖の名前によるもの。
3、職業名によるもの。
4、「何々屋」と云ふ純然たる家号風のもの。
5、その他、姓、地位、悪口等で呼ばれるもの。

等々になり、又人名、職業の複合等になります。

酒匂中宿で呼ばれている家号呼称の主なものを照会すると。（末記の職業は大正期の職業）

◎近世交対で名主を務めし対抗的名家。

南＝風土記地誌に記載の鈴木新左衛門宅で新左衛門を襲名、明治七年火災にて本宅焼失明治四十年頃に東京に移住現在の「松川園」一帯の地にて、名主時代明治天皇御東還の折り御休息せり、今その跡に記念碑がある。有名な北条家の侍大将弓の鈴木大学の生家。

北＝川辺本家団衛門を襲名、前記南、鈴木家に対して北。（道路の南と北側で向い合っている）網元で川辺鰤大尽で有名、現在の「ゆりかご園」の処。

◎世襲名によるもの。

五郎ぜあん＝風土記地誌の酒井五郎右衛門宅。後北条時代の酒匂郷の名主五郎右衛門を襲名、小田原合戦の折りの秀吉軍のふれ書等古文書多数あり。（農家）

忠べやん＝山崎忠兵衛を世襲。江戸～昭和初期の村役、官吏。幕末に黒船が前羽沖に来航した時の報告書等古文書多数あり。（役場助役）

小四郎あん＝県会議員川瀬岩次郎宅。小四郎を世襲。江戸時代の村役人（農家、漁業監督）

又べやん＝川瀬又兵衛を襲名。明治大正期に干し魚を東京の市場に回送していたので「江戸ヤリ」とも呼ばれている（魚屋、運送業）

◎当主又は先祖の名前によるもの。

小島善あん＝風土記地誌の小島徳右衛門宅で、明治時代の当主の名。後北条時代酒匂郷の代官を務めし旧家。足柄鎧一領及び古文書多整あり。大見寺にある小島家の墓（五輪塔宝筐印塔）は小田原市の指定文化財である（農家）

次郎えあん＝川瀬家の総本家と云われり旧家。明治期の当主の名、大正期以後畳職なりし、ため「タタミ屋」とも呼ばれる（農、畳職人）

けーぞーあん＝川辺家の元祖と云われる旧家で、紀州より来迎し元小島を名乗りしが、由井正雪の乱に連座し、川辺と名字を変えしと聴く明治期の当主の名。大正期以後豆腐を製造小売りせしため「トーフ屋」とも云ふ（農家）

かん七さん＝酒塩等を売っていた商店。大正期の当主の名を商店名にしていた。

◎職業名によるもの。

飛脚屋＝明治期に東京～小田原間の定飛脚をしていた。（行き一日、帰り一日中の一日は東京で休養）（農家）

芋金＝芋の行商。（芋売り金さんの略か）

※外に足袋屋、菓子屋油や、呉服屋、小間物屋、貸本屋、おけ屋、下駄屋、屋根屋等の職人があり、それ〴〵農事の片わら商売していた。

◎宿場に関係ある純家号風のもの。

玉や＝前記の通り昔の茶屋（農家、荷馬運送）

黒金屋＝山崎忠べやんの別れで、酒匂鍛冶に関連した家号。大阪方面に諸物産を回送せしこともありと聴く（小田原史談会報82号「酒匂鍛冶老」に詳細あり（農家）

田中屋＝奈良朝当時茶屋を営なみしと、坂田の金時山姥伝説あり、古墓の礎石に「田中屋」と家号刻みあるもめずらしい（農家）

大山屋＝鎌倉時代の茶屋。現在の「大山屋酒店」は家号のみ踏襲した別の家。二宮金次郎先生の弟子（農家、学者。息子は電気鉄道の工夫長）

山田屋＝鎌倉時代の宿屋なりしと（農家）

◎姓を呼ぶもの。

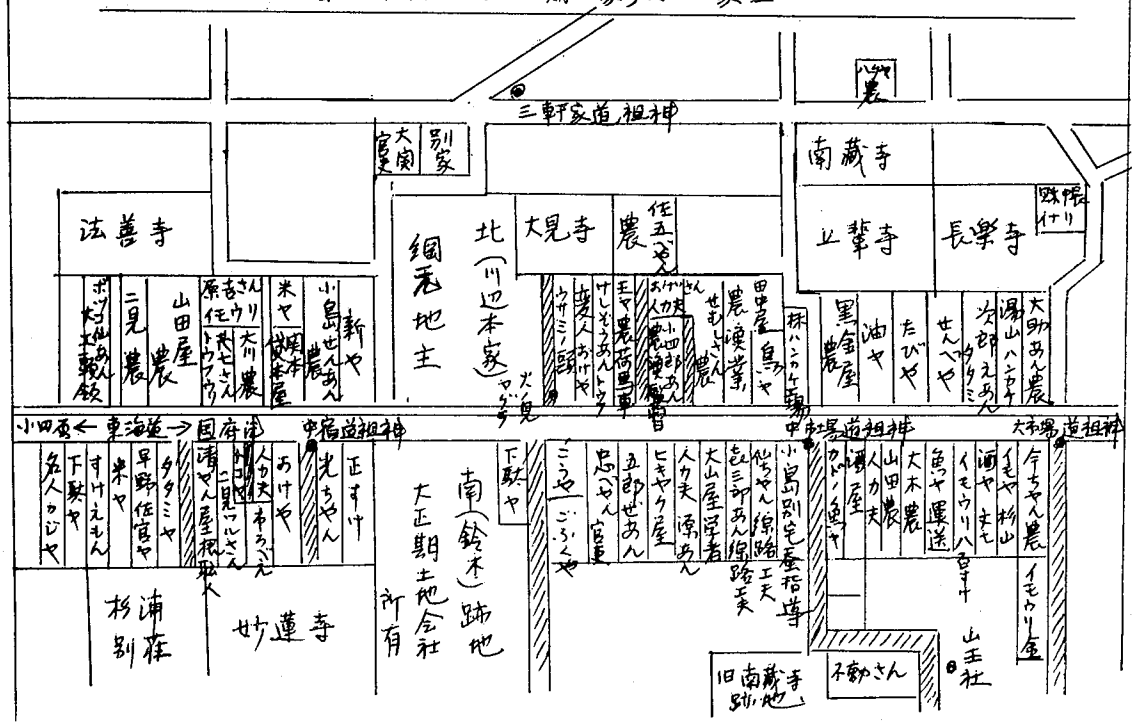
小島＝横浜の生糸商「小島某」の別宅にて、明治期に民家で木造三階建て瓦屋根の家は、小田原近辺で小島家のみなりしと（関東大震災にて倒壊）二階に「長谷部万作」氏（長谷部中将の父）が住んでおり養蚕の指導をしていた

林＝沢衛門を襲名、江戸期の村役人「沢えもんあん」と呼びにくいためか、姓を呼んだ。明治末期～大正期に「ミシ

図1 戸数人口等比較 明治18年

| 種別＼村別 | 酒匂村 | 小八幡村 |
|---|---|---|
| 戸数 | 220戸 社1寺10 | 133戸 社1寺1 |
| 人口 | 1337人 男684 女653 | 797人 男380 女347 |
| 馬 | 1頭 | 1頭 |
| 漕舟 | 5隻 | 21隻 |
| 渡し舟 | 3〃 | 0 |
| 荷車 | 23台 | 4台 |
| 人力車 | 82台 | 8台 |
| 大工 | 3人 | 2人 |
| 左官 | 1人 | 0 |
| 屋根職人 | 4人 | 1人 |
| 人力車夫 | 61人 | 9人 |
| 醤油業 | 2軒 | 1軒 |
| 煙屋 | 2〃 | 1〃 |
| 床や | 1〃 | 1〃 |
| 農具小間物や | 3〃 | 1〃 |
| 煙草や | 1〃 | 1〃 |
| 草子や | 1〃 | 0 |
| 飲食店 | 5〃 | 2〃 |
| 穀類商 | 6〃 | 1〃 |
| 魚商 | 30人 | 1人 |

図2、酒匂中宿　大正期の家号及び家並



ン」を置き近郷の娘を雇い「ハンカチ」工場を営む「ハンカチ屋」とも呼ばれていた。

宇佐美＝消防の小頭で当時酒匂に小頭が三人いた「宇佐美の頭」と呼ばれ、大見寺の入口（ジョーオグチ）に火の見櫓があり「鐘番」にも呼ばれていた（農家）

◎その他。

新や＝南　鈴木家の分家。

別家＝北　川辺家の分家。（ここでも対立的）

せーむさん＝後北条～明治期の世襲村役人（昔より村役を務めし家は多いが、世襲的村役はこの家のみなりしと）諸務の転化せしものか、又は世襲名清右衛門の転化か、定かならず。（農家）

◎変った呼名では。

変人おけや＝桶職人で、変人おけやの作った桶は炎天に転がして置いても水漏れしないと云われた。

ボッコ仙やん＝大工の頭領で小田原に大工の弟が居り、この弟も「ボッコ「兄弟そろって「ボッコ」と云われた名人川辺本家、松濤園貸別荘等すぐれた建物を作った。

名人かじや＝名人の打った鍬には土が付かないと云われた。

※この三人近世の酒匂三名人と云われた職人です。名人ともなると常人とは多少異っていたのでしょう。

大正期を中心に風聞せし家号の一部をあげたが、現存しない家もある。面白い事にこれ等酒匂の旧家ではどこの家にも「お稲荷さん」が祭ってある。云い変えればお稲荷さんが祭ってあれば、明治以前よりの旧家と判断してもよい。各家々や呼称にはそれ〴〵に歴史があり、又家号を裏付ける数々の遺品を蔵している家号は酒匂宿を知る貴重な資料とも云える。たとえば「図2」にて気付く苧売りの多い事（イモ金、杉山イモや、八百すけ、原吉さん）いずれも親類で、秦野方面より大量に仕入れ、親類仲間で分配して売る、いわゆる一族商法の名残うや、明治二十一年に国府津～湯本間に鉄道馬車が開通し、酒匂宿を走っていた関係上、貸別荘、別宅、別荘が出来線路工夫等の新しい職業が生れ、又江戸末期の逸話にこんなものもあります。

酒匂は酒匂川の川越えを控え、通常は街道の一寒村にすぎないが、大雨や長雨で「川止め」になると宿場に急変し旅人で賑わった。特に大名なぞが川止めにに合おうものなら大変であるお殿様や、主だった家来は名主や村役、地主宅等村の有力者の処に宿泊するが、下級の家来は一般の農家商家に分宿する。それも「お達し」による割当てで。大名と云ふと聞えは良いがお手当てなぞは最低で、おまけに「何のかんの」とうるさい事。ある農家では割当てられて宿めた侍の食卓を三度々々菜葉でもてなしたと。やがて川止めが解けて大名は出立。っこの農家に泊った侍が出立っに際して

「一昨日もナ、昨日もナ
今日もナ、大きにナ
ありがとナ。」

と狂歌を詠み以後「菜葉や」と称せと言ったと云ふ酒匂宿の姿が彷彿と浮んで来る様な話しである。しかし「菜葉や」と云ふ家号は呼称されてない。

家号呼称が醸し出す云い知れぬ情味を覚ゆるは一人私のみであろうか。家号は大切に残して置きたいものである。

余　話

◎酒匂に伝はる「坂田の金時山姥伝説

坂田の金時の母即ち山姥は酒匂川端の和田市郎兵衛（法船寺東隣の家）の娘で酒匂中宿「田中屋」に茶屋奉公していたが、後京にのぼりて「白拍子」となり、坂田蔵人と慇懃を通じ身ごもり郷土で産まんとして足柄山竹の下まで来て出産した。この子が足柄山で育ちたる「足柄山の金太郎」である。源頼光が上総の任地より京に帰る途中足柄山にさしかかり、この童の常ならざる相形を見「坂田の公時」と名を与えて家来とした。源頼光四天王の一人「坂田の金時」と云ふ。

◎名主の納屋より出たものわ。

明治三十五、六年頃、前記「せーむさん」で、納屋（倉）を取り壊そうと中を片付けていた時、中央の柱に古びた「火の用心」と書いた板札が打ち付けてあった。何気なくこの板を剝した処、柱に約十糎程の穴が下方に貫いてある。何だろう「ネズミ」の穴にしてはおかしい、こわごわ棒で突っくと中に何か入っている大人では手が入らない、丁度良い時に向いの腕白小僧が来た、取らせて見ると錦の「ボロボロ」の布にくるまった「おかね」だ、一分金二分金合せて五十両「バンザイ」早速親類縁者、近所に一、二枚づつ分配し先祖の余慶に浴した。この話し尾鰭がついて近郷の大評判となった。

それから数年後。元名主の「南」鈴木新左衛門宅で東京移住のため家屋敷、家具等を競売に附した。小八幡の或る人は納家を良い値で買った「せーむさん」で五十両も出たのだ、元の名主さんの納家だ何か出るだろうと（思惑買いですね）わく〳〵しながら納家を取り壊したが何も出ない。いや出た〳〵「タニシ」の干したものが俵に三俵ときれいな「貝がら」が十個程。高い買物をした、大損したと「ボャ」いていたとか。

後で判明した事だが「タニシ」の干したものは天保大飢饉や嘉永の大地震での苦い体験により村人に「タニシ」を取らせ集めて置きし村の非常食で雑草と混ぜて食えば村人一年分の食料となる量とのこと。又「貝がら」は「夜光貝」で槍の柄や鏡台、手箱に嵌め込む貴重品（現代の宝石と云う所か）で村の非常時には、これを売って村の急を救うための貯えとのこと。さすがに名主ともなれば、人の上に立つ者は平素よりの心掛けの立派な事と唯々頭の さがる思いであったと。この話しは、この二つの事件を目げきした八十路をすぎて尚元気な古老の談話です。うれしい話ですね。

◎この外酒匂には酒匂鍛冶を物語る「棒や」、また宿場を物語る「河原家敷」、「ダンゴ屋」「お茶屋」等の家号がありますが、今回は酒匂中宿の家号並びに、大正期の町並みの紹介にて筆を止める。

古老より風聞せし談話が中心なれば年代その他に多少の差異があるかも知れません、不悪。

取止めの無い話しで恐縮しています。茶呑み話し程度に受止めて下さい。

昭和五十三年九月記す。

## 九月定例理事会報告

九日（第二土曜日）午後一時三十分より中央公民館で会合しました。要点のみ列記してみます。

一、九月二十二日　沼津方面の史跡廻り

一、十月の行事は講演会として宇佐美先生を依頼して「近世小田原地方の交通史」と内定

一、史談会の顧問として駒沢大学教授、前東大教授　小田原文化財保護委員長の杉山博先生をすいせんする事が決まりました。